

尻別川の未来を考える オビラメの会



OBIRAME RESTORATION GROUP NEWSLETTER

30

June 08



INDEX

2年連続採卵はならず
札幌でイトウ保護訴え
さけ科学館に感謝状
尻別川計画検討委報告
みどりの基金助成決定
再導入河川に魚道完成
イトウ希少種条例指
定種に？
放流魚追跡調査報告
リレーフォーラム
& 総会のご案内

30

すくすく育て！尻別イトウたち

ニセコ町立近藤小学校に オビラメ稚魚を預託



オビラメの会は5月21日、尻別川のイトウを流域の子どもたちに育ててもらおうと、人工孵化で生まれた稚魚40匹をニセコ町立近藤小学校（児童数23人、河田茂校長）に預託しました。

運び込んだのは、昨年5月20日に「ノリカ」から採卵し、人工孵化に成功した稚魚たち。これまでに北海道立水産孵化場（恵庭市）で飼育され、約7cmの大きさです。面倒を見ることになった5年・6年生10人がさっそく水槽に移してくれました（上の写真）。

引き続き教室で、同孵化場主任研究員の川村洋司さんがイトウ飼育についてミニ授業（左の写真）。子どもたちの関心も非常に高く、次々に質問の手が挙がっていました。

（撮影・足立聡、文・平田剛士）

2年連続の採卵はならず

俱知安町内のオビラメ親魚飼育池で5月21日、恒例のイトウ採卵見学会を開きました。

前夜まで続いた大雨もなんとか上がり、池の水を抜いて5個体のイトウを1年ぶりに捕獲。会員ら約20人が見守るなか、雄の「チビ」は成熟を示す鮮やかなオレンジ色に体色を変化させた姿を現し、昨年に続く採卵成功に期待が高まりました。しかし残念ながら雌たちからの採卵はなりませんでした。同時に全個体の測定がおこなわれ、どのイトウも健康な状態であることが分かりました。

川村洋司・北海道立水産孵化場主任研究員の話

「イトウは、飼育下で大量の餌を与えて育てれば毎年抱卵することもあります。自然状態では2〜3年おきに産卵するのが一般的。オビラメの会のイトウたちに健康状態の問題は全くありませんし、人工孵化の魚たちもあと2年ほどで成熟年齢に達するので、今後の採卵についてはそれほど心配していません」



飼育親魚の尾叉長を測定する川村洋司さん(撮影・足立聡)

イトウたちのサイズ(2008年5月21日現在)

	性別	尾叉長(cm)	前年比	体重(kg)	前年比
ササキサン	雌	93.5	+1.5	8.80	-1.90
チョースケ	雌	88.5	+1.0	9.62	-0.20
ノリカ	雌	91.3	+2.3	8.04	-0.02
キンチャン	雌	67.1	+1.6	3.34	+0.46
チビ	雄	88.3	+0.8	7.28	-0.42

札幌・大通公園でイトウ保護を訴え Earthday Ezo 2008 in 大通



行き交う人々の注目を集めたオビラメの会のブース(撮影・平田剛士)

オビラメの会は5月17日、札幌・大通公園6丁目広場で開催された「Earthday Ezo 2008 in 大通公園」(アースデイ EZO 2008実行委員会)に出展しました。昨年に引き続き2回目の参加。テントブースには、オビラメの会事務局のシンボルである巨大イトウの剥製を展示し、また当会会員で写真家の鈴木芳房さんによる人工採卵の様子をとらえた写真作品や、オビラメの会の活動を紹介するポスター、資料などを並べ、入会案内のパンフレットやオビラメレスキューカードなどを配布しました。

札幌の初夏らしいさわやかな好天に恵まれ、会場は大勢で賑わいました。ブースの軒先に飾った約1メートルの尻別イトウの原寸大写真パネルに引きつけられるように訪れるお客さんたちが多く、迫力あるイトウの剥製に「これ、ホンモノですか?」「こんな魚がまだいるんですね」「触ってもいいですか」と感嘆した様子。尻別川のイトウ保護を訴える吉岡俊彦事務局長らの解説に熱心に耳を傾けていました。

お帰りなさい、尻別川へ

豊平川さけ科学館からイトウを移送

オビラメの会は1月29日、これまで札幌市豊平川さけ科学館(同市南区)に預けていた尻別川産イトウ(人工孵化魚)21匹を引き取り、ニセコ町内の飼育施設「ヌプリの森水」に移送しました。

移送したのは、当会が北海道立水産孵化場の協力で2004年春に「デカ」から採卵して孵化させた約1万2000匹のうち、同科学館に「分散飼育」を委託していたイトウたち。大切に育てられ、はじめ数センチだった稚魚たちが、約40cmの若魚に成長しています。会員たちは酸素を注入した大型のビニール袋に数匹ずつ小分けしたうえ、水温が上昇

しないよう雪を詰めたコンテナに注意深く並べて、ワゴン車で約2時間かけてニセコまで運搬しました。

同館の4年にわたる協力に感謝し、飼育を担当してくださった有賀望学芸員に吉岡俊彦事務局長が感謝状を手渡しました。

同館では引き続き20匹の尻別イトウを飼育・展示しています。(写真と文・平田剛士)

札幌市豊平川さけ科学館
札幌市南区真駒内公園2
入館無料、月曜休館
☎011-582-7555



尻別川圏域河川整備計画 検討委員会りぽーと

平田剛士 オビラメの会

3月24日、京極町公民館で第2回尻別川圏域河川整備計画検討委員会が開かれ、吉岡俊彦委員(オビラメの会事務局長)の代理で筆者(平田)が出席しました。

北海道小樽土木現業所が新しい整備計画を策定するに当たって委員会に諮問しているもので、前回会議は一昨年11月に開催。オビラメの会は(1)イトウ個体群の保全・復元を計画本文に明記してほしい、(2)土現だけでなく他の部局間での連携を図ってほしい、と提案していました。

事務局は今回、当会の提案に対して「尻別川がイトウの生息南限で絶滅寸前」「市民グループが再導入を図っている」「絶滅が危惧されるイトウをはじめ、貴重な動植物の保全と復元が将来的に達成されるよう努めていきます」「河川事業以外の事業と連携しながら」「地域住民、関係機関等と連携、調整を図り」といった文章を新たに加えた「計画案」を提示しました。委員が意見を求められたの

で、筆者は「イトウへの配慮を計画本文に書き加えたことは評価するが、『将来的に達成されるよう』では漠然としすぎているので、具体策を書き込み、モニタリングとその評価、それに基づくフィードバックをやる、ということを明記すべき」「さきごろ環境部局による希少種条例に基づくイトウ保護管理方針が明かされたので、ぜひこちらとも連携してほしい」と述べました。

関連して岡村俊邦委員(道工大教授)が「この長期計画が完了する前にイトウが絶滅してしまうかもしれない。保護や復元の目標や具体策を盛り込むべき」、また眞山紘委員(栽培漁業振興公社)が「イトウのみならず、カワヤツメやサクラマスなども近年は希少種と判定されている。下流から上流まで広く再生産環境を整える必要がある」と述べました。検討委員会は総じてイトウを含む自然環境への関心が高い印象です。

次回委員会は7月開催予定です。

セブン-イレブン みどりの基金 助成決定

当会の「絶滅危惧種イトウ尻別川野生個体群復元事業」に対して、2008年度公募助成事業を進める「セブン-イレブンみどりの基金」はこのほど91万9100円の助成を決定しました。同基金は「全国約1万2000店のセブン-イレブン店頭」の募金箱にお客様から寄せられた募金をもとに、「(みどりの基金だより)」運営され、今年度は180団体に総額1億円あまりを助成。当会は2005年度に続き、2度目のサポートを受けます。

草島清作オビラメの会会長の話

本当にありがとうございます。当会はオビラメ復活30年計画の道半ばですが、ご支援のおかげで今後も前進続けることができます。

落差工に魚道完成 イトウ再導入河川で今後も



改修前(上、2007年6月撮影)と改修後(下、2008年3月撮影)の倶登山川1号落差工。

オビラメの会がイトウ再導入実験を進めている尻別川水系倶登山川(倶知安町)で、魚類の自由な往来を妨げていると考えられる落差工群のうち、最下流の「1号落差工」に3月、新しい魚道が完成しました。

「1号」は約40年前に建設された農業用落差工。落差70cmの堤体本体と、下流部が洗掘されて約40cmの落差を生み出していたコンクリート製の水たき部(長さ10m)の中央に、新たに幅2mの魚道を掘削。魚道内にハーフコーン状構造物をジグザグに配したほか、これまで渇水期に水深数cmと極端に浅くなっていた水タタキ部に自然石の列を配置して水深を確保するなど、イトウをはじめとする魚類の通行により配慮したデザインです。工費は約2000万円。

当会は2005年秋、倶登山川の落差工への魚道設置を北海道後志支庁などに要望。同支庁は2006年、予算総額1億円をかけて落差工5基を改修することを決め、魚道整備環境配慮検討会を設置して当会や地域団体と協議を重ねてきました。

この検討会で当会は「ありきたりのものではなく、1歩でも半歩でも先進的な魚道を」(吉岡



俊彦事務局長)と主張。「泳ぎ上り」可能なハーフコーン構造物、水タタキ部の水深確保対策などを提案し、多く採用されました。また「オビラメミニシンポジウム in 札幌」(2007年12月7日、北海道環境サポートセンター)や、勉強会「イトウ再導入河川の落差工魚道工事」(2008年1月19日、ニセコ町民センター)などを

主催して議論を深めてきました。

同支庁によれば、残る2号～5号落差工のうち、2008年度は2～3基に魚道を新設する計画。当会はより理想的な魚道の実現とイトウ再導入の成功に向けて、引き続き積極的に提言していくことにしています。(写真と文・平田剛士)

にわかに現実味？ 希少種条例イトウ指定を巡って道と協議スタート

イトウ保護 連絡協議会

絶滅に瀕した動植物を種ごとに指定して採捕や譲渡を規制する北海道希少種保護条例で、新たにイトウを指定しようという動きが活発化しています。

2月20日には後志支庁で「指定希少野生動植物の指定に向けた意見交換」会(同支庁主催)が開かれ、流域町村役場やオビラメの会、NPOしりべつリバーネットなどが出席。道庁自然環境課の担当者が「道条例に基づいてイトウを保護できないか、方策を検討しています。規制ありきではなく、地域のみなさまのお取り組みを尊重し、そのお手伝いができるようにと考えています」と説明し、「イトウの産卵期である4月～5月の期間は、イトウを釣ることは控えましょう」とお願いするチラシを全道の釣り人に

配るプランを明らかにしました。

この動きに対して、当会も加盟するイトウ保護連絡協議会では慎重論が相次ぎ、各団体代表者の連名で3月17日、高橋はるみ知事に「協議会を含め地元住民、釣り人、研究者らと交えての協議と合意形成の場を設けてほしい」などとする提案文を提出しました。

同日、道庁で開かれた意見交換会では、「イトウの置かれている状況は水系によって大きく異なり、それぞれの水系でどこに問題があるのかも分かってきている。このことをまず認識することが大事」(Friends of River 斜里川を考える会)、「尻別川に限って言えば、イトウを増やすには釣り人に自粛を求めるより環境復元がまず第一に必要」(オビラメの会)、「イトウを守る

ために環境破壊にも規制をかけてほしい。そのための議論の場を設けてほしい」(道東のイトウを守る会)といった意見が続きました。

同じ席上、道は「産卵期釣り自粛」要請を先送りすると回答し、各地の団体に対して、それぞれイトウ保護のために必要な施策について具体的な要望・提案を求めました。

これを受けてイトウ保護連絡協議会は4月5日、旭川市内で臨時総会を開き、各団体が5月から冬にかけてリレー方式で討論会を開催することを決定。オビラメの会は6月21日にニセコ町民センターでフォーラムを開き、尻別川に最適なイトウ保護策を議論します(詳細は6ページをご覧ください)。

放流イトウモニタリング報告

酪農学園大学、オビラメの会会員
大光明宏武



今年は雪解けが例年よりも早かったため、イトウの産卵期もかなり早く、イトウともども驚いておられます。

さて、昨年11月発行の「ニューズレター29号」では発行日とモニタリングの日程の関係から11月調査の結果を報告していませんでしたが、11月の調査でも29号での報告同様、2006年11月から捕獲数、成長状況ともに目立つ変化はなく、2004年生まれのイトウが計5尾捕獲されました。グラフ1、グラフ2をご参照下さい。

山地溪流など、上流にイトウ稚魚・幼魚の生息環境が少ない河川(たとえば石狩川水系空知川など)では、孵化した稚魚は浮上(河床の卵室から出て流れの中に泳ぎ出てくること)直後に流下し始めて、浮上時期を10日程過ぎたころには産卵支流ではほとんど姿が見られなくなります。

一方、オビラメの会がイトウ稚魚の放流とモニタリングを進めている尻別川水系倶利伽羅川流域のA川では、産卵環境も稚魚・幼魚の生息環境もあるので、もしかすると2歳ころまでは多少は残る個体もいるかもしれないと予想していましたが、まさか満3歳を過ぎてこんなに成長するまで残留するとは思っておらず、「あれ、おかしいな??」と思っていました。

そればかりか、ほかの生息地のイトウなら定位しないような、カバーなしの平瀬のド真ん中にポカンと定位していたり、数尾が同じ場所にかたまっていたり……。この放流イトウのやや異常とも思える行動を観察して、これで果たして、外敵(A川では鳥、アメマス、ヤマメ、ウグイ、カジカ)に捕食されることなく生き残ってくれるかと心配していました。

しかし今ではA川の放流イトウたちは30cm～40cmにまで成長しており、みんなで放流したイトウが確実に生き残っているところを見るとひとまずは安心といったところです。

次にA川での放流イトウたちの分散状況をみてみましょう。これまでの追跡調査によれば、秋放流魚が自然区間(上流側)、春放流魚が改修区間(下流側)に分散していることが分かりました(グラフ3)。これは、先に秋放流魚が流下分散時に自然区間のカバー豊富な生息環境に留

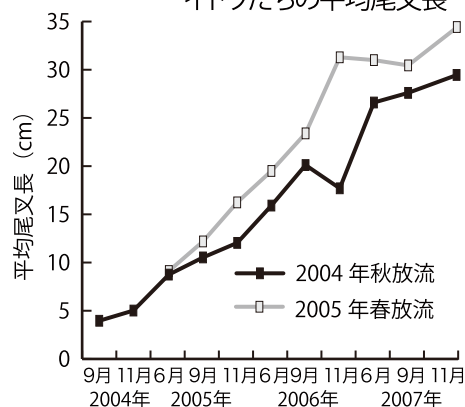
まり、下流の改修区間では留まることが出来ずに流下し、約9カ月後に放流された春放流魚は自然区間に留まりたくても先に秋放流魚が定位していたため、カバーの乏しい改修区間にやむを得ず定位した結果で、先住効果(秋放流魚が先住していた)によると考えられます。春放流魚は放流時にすでに1歳を迎えていたため、カバーの少ない改修区間でも定位できたのではないかと推測しています。

また、放流イトウの生息環境を調べてみると、放流後半年から1年の間は、秋放流魚の捕獲場所は水深5cm～60cm、春放流魚では25cm～75cmと、浅場から深みまで幅広く定位しており、この結果からは体サイズと水深に一定の関係(たとえば、体が大きくなるにつれて定位水深は深くなる、など)があるとは言えません。

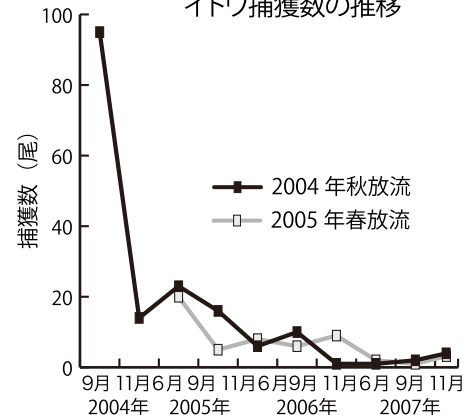
仮に、このA川が上流から下流まで全て自然状態で、かつ、体サイズと定位水深に関係がない場合を考えてみると、秋放流魚はこれまでのモニタリングの結果よりも少し多くの個体が残存、春放流魚はそれらに混じってもう少し少ない数が分布するだろうと予想出来ます。なぜなら、秋放流魚が先に隠れ家となるカバーの豊富な環境に選択的に分散し、定位します。その後に放流されるイトウが分散すると、前述した先住効果によってさらに流下分散せざるを得なくなると考えられるからです。グラフに現れているような放流時期の違いによる分散パターンの差異は生じないと考えられます。

このことは、新たに放流河川を選定して放流する際、0歳の秋放流と1歳の春放流を両方やるか、またはどちらか一方にするか、河川環境と分散パターンを考慮したうえで検討しなければならないということを示唆していると思います。

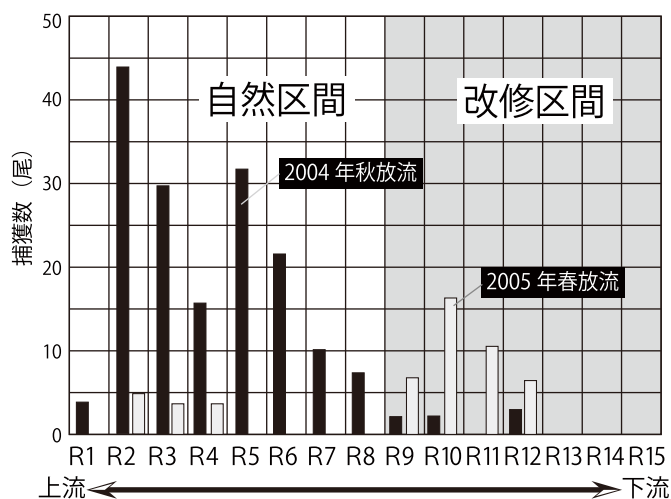
グラフ1 放流河川内で捕獲したイトウたちの平均尾叉長



グラフ2 放流河川内でのイトウ捕獲数の推移



グラフ3 調査区間別のイトウ分散状況



2008.6.21 イトウ保護 連絡協議会 リレーフォーラム &オビラメ総会 のご案内



とき 2008年6月21日(土曜)

ところ ニセコ町民センターなど

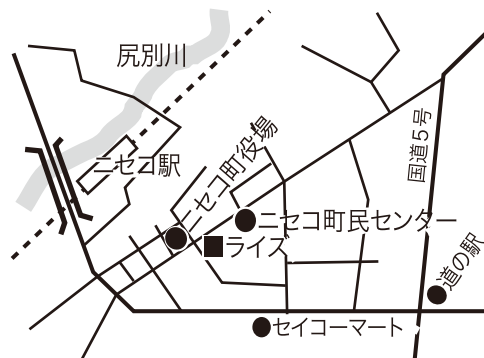
参加費 無料

プログラム
午前10時 オビラメ放流会
倶知安町・富士見橋広場集合
午後1時半 フォーラム「尻別川のイトウを守るために」
午後4時 オビラメの会2008年度通常総会(会員のみ)



お問い合わせ
オビラメ事務局 ☎0136-44-2472(吉岡俊彦)
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

本フォーラムは「イトウ保護連絡協議会2008リレーフォーラムChapter2」として開催されます。総会では新年度会費(1口2000円)を承ります。総会をご欠席の方は郵便振替(下記)をご利用ください。



「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

ご支援
ありがとうございます

オビラメの会は、会員のみならず
まよりの会費と、寄付金、および
日野自動車グリーンファンド、セ
ブン-イレブンみどりの基金、パ
タゴニア日本支社の助成金を受
けて活動しています。

セブン-イレブンみどりの基金

日野自動車グリーンファンド
patagonia

オビラメの会ニュースレター 第30号(2008年6月発行)
OBIRAME Newsletter No.30 June 2008
■発行■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編集■ 平田剛士
■印刷■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町4-4-1)
■発送■ 吉岡俊彦
■郵便振替■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2008 Obirame Restoration Group
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう
御食事処・酒房

ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp